

「黒岩さん、俺のわがママを聞いてくれ」

佐々木さんは85歳。僕の勤めるデイサービスの利用者でした。寡黙な男性です。利用者のほとんどが女性という中で貴重な存在です。口数は少ないですが、身体の不自由な女性利用者にさりげなくお茶を注いでくれたり、歩行が不安定だと手を貸してくれたり心優しい方です。その佐々木さんが、ある日突然、僕のところへやってきて相談をもちかけてきたのです。

### 最期は家で

「入院している母ちゃんを家に連れて帰りたいんだが、手伝ってくれないか？」

僕は、突然のことで状況がつかめませんでした。

「佐々木さん、何でもお手伝いしますが、どうしたんですか？」

「実は、俺の母ちゃんは病気で10年ほど前から入院している。自分で動くことはほとんどできません。しゃべることもほとんどできません。ベッドの上で寝てばっかりじゃ。俺はこの10年間、自転車で

認知症の人が  
最期まで「生ききる」暮らしの支え方 **9+**

# 「俺は、最期に 母ちゃんと同じ 寝床で寝たど」

家で最期を迎えてほしい。  
そんな家族の願いにどう応えますか？

文 | 黒岩 尚文 (共生ホーム よかあんべ 代表)

毎日片道20分かけて、母ちゃんの好きなものを届けてきた。加治木まんじゅうや回転焼き、甘いものが好きで、喜んでよく食べた。ところが、1か月くらい前からご飯を食べん。よく引っかけると看護婦さんたちから言われるようになった。医者もそろそろ鼻から管を通して栄養をやったほうが良いと言い出した。俺は

10年間気張つてきて、母ちゃんの喜ぶ顔が嬉しかった。雨が降る日も寒い日も毎日病院に会いに行つた。いつかまた元気になつてくれれば思つて気張つてきた。管をつけられた母ちゃんを見るために気張つてきたんじゃない。もう十分、母ちゃんも俺も気張つてきた。鼻から管を入れるというなら家に連れて帰る。家で死んで

しまつてもかまわん。母ちゃんだつて俺を恨んだりしないと思つて。最期は家に帰りたいと思つてはるはずじゃ。頼むから一緒に車で迎えに行つてくれ。家に連れて帰つてくれ」

僕は、佐々木さんの奥さんの状況はこれまでほとんど知りませんでした。自分のことを全く話さなかつたので、正直、一生懸命に僕に訴える佐々木さんに圧倒されてしまいました。

「佐々木さん、わかりました。まずは連れて帰つていいか病院の先生に相談しましょう」と僕はその場で返答しました。

### 先生の答えは「No」

翌日、佐々木さんと一緒に奥さんの入院する病院に行き、主治医の先生に相談しました。もちろん、先生の答えは「No」でした。

「今の状態で家に連れて帰るのがどんなことなのか、君はわかっているのか？」ご主人さんが思っている以上に状態は悪くなつていく。家に帰つて水分も栄養も摂れなかつたら、1週間もたないよ。

君は軽はずみなことをして責任がとれるのか？。当然のことながら厳しく叱られました。

いったん佐々木さんと自宅に戻り、再度話をしました。しかし、佐々木さんの気持ちは全く変わりません。「先生が何と言おうともういいんだ。連れて帰りたい。黒岩さんに迷惑はかけんから…。頼むから連れて帰ってくれ」

佐々木さんとは、これまで3年以上お付き合いをしてきました。が、こんなに必死な姿を見たのは初めてでした。そんな佐々木さんの姿に僕は背中を押され、「わかりました。お手伝いします」と答え、それから3日後、病院の反対を押し切り、病院から自宅へお送りしました。

## 在宅での生活

自宅に奥さんをお連れしてから、佐々木さんと一緒に近所の医者にごこれまでの経緯とこれからのことをお願いに行きました。病院の反対を押し切って帰ってきたので、その先生も快く引き受けてくれることはありませんでした。「最期、何かあったら連

絡してください。その時は対応します」とのことだけです。それから、ヘルパーと佐々木さんの在宅介護が始まりました。

在宅介護といっても正直、僕らには何もできません。手足を拭いたり、手をじつと握って傍にいたり、病院の先生から言われた通り、何も口から食べられないので、唇を少しずつ湿らせてあげる程度です。佐々木さんはずっと奥さんの傍から離れませんでした。僕は「これで本当に良かったのか？」と何度も自問自答しました。何度も何度も不安になりました。

自宅に戻られてからちやうど1週間後、佐々木さんの奥さんは静かに息を引き取りました。僕は後悔しました。僕のしたことは本当に間違っていないかったのか。佐々木さんを説得し、家に連れて帰ることを諦めさせることが僕の役目だったのではないだろうか。先生の言うとおりに入院を続け、鼻からでも栄養を摂り続けていけばもつと長く生きられたのではないだろうか。大変なことをしでかしたと後悔しました。

## 奥さんが亡くなつて…

奥さんのお通夜も終わり、お葬式の時に僕は佐々木さんの自宅にお伺いしました。

「佐々木さん、ごめんなさい。僕が家に帰ることを手伝わなかつたら、奥さんはもつと長く生きられたかもしれません。本当にごめんなさい」

僕は佐々木さんに謝りました。一生懸命に頭を下げました。すると佐々木さんからは意外な言葉が返ってきたのです。

「黒岩さん、何を言っているん



だ。どうかお願いだから謝らなくてくれ。あなたたちのおかげで母ちゃんは家に帰ってくる事ができた。鼻に管も通さず最期を迎える事ができた。ありがとう。黒岩さんたちはいい歳してつて笑うかもしれないが、俺は昨夜久しぶりに母ちゃんと同じ寝床で寝た。病院で死んだらこんなことはできなかつた。ほんとにありがとうな」とゆつくりとした口調で、笑顔で話をしてくださいました。

それから1か月後、佐々木さんがまた僕のところをやつてきました。

「ほらほら、見てくれ」と1枚の写真を見せてくださいました。それはお墓の写真です。「ほれ、見てください。お金をたくさん使つて立派な墓を作つた。このあたりじゃ一番良い、大きな墓じゃ。やがてお迎えがきたら俺も死ぬ。その時また母ちゃんと一緒に暮らさないかんからな。一番上等な墓を作つたぞ」

佐々木さんの誇らしげな、満面の笑顔が今でも忘れられません。佐々木さん、ありがとうございました。